

シンポジウム  
－「同志社にとっての 1876 年」－

## 一日研究会のプロローグ

本 井 康 博

### 今年は異例の研究会

皆さま、お早うございます。新型コロナ感染危機のため、私たちの夏の年中行事、一日新島研究会が、去年は中止になりました。今年は ZOOM 配信という変則形ではありますが、「無観客」でなんとか開催に漕ぎつけることができました。

大学からこうして発表するのは私だけで、ここ至誠館会議室にいるのは社史資料センタースタッフふたりと私の 3 人だけです。私以外の発表者 3 人はそれぞれ千葉、京都、大阪の自宅からライブ参加というわけです。

異例と言えばさらに、今年の研究会は「大御所」の北垣宗治先生、井上勝也先生が研究会からの引退を表明され、第一線から身を引かれた最初の研究会になります。私たち委員にとっては、毎月の運営委員会でいつもご一緒だった大御所委員のお姿に接することができなくなり、寂しい限りです。

一日研究会も、いつもならおふたりの長老が企画の段階から本番まで、引っ張って下さるのですが、今年からそれが望めなくなりました。それで、「若手ががんばるべき」との叱咤激励もあって、准古参の私（来年、80 になります）が今回、手を挙げてプロデュースすることになりました。

そこで最初にプロローグとして、私から今日の研究会の狙いと内容とを申し上げます。書籍で言えば、「まえがき」と「目次」にあたります。

### 全体テーマは「同志社 1876」

書名（テーマ）は「同志社にとっての 1876 年」にしました。「なんじゃこりゃ」と思われるかもしれませんが、これにはれっきとした理由がありま

す。かりに昨年、研究会が開かれておれば、おそらくテーマは「同志社 1875」で確定していたと思います。創立 145 年を迎えた節目に、来たるべき 150 周年にどう向かうか、が話題の中核になったはずです。

昨年の研究会が一年延期されたと考えれば、いま開かれている東京オリンピック方式、「東京 2020」のように、テーマはそのまま「同志社 1875」でもよかったはずですが、幸いにもというべきでしょうか、「同志社 1876」と「同志社 1875」には、大きな違いがあります。こんなことでもなければ、創立翌年のことなんか、誰も注目いたしません。

同志社の創立が 1875 年であることは、「常識」中の「常識」になっています。しかし、改めてその翌年の 1876 年に目を注いで見ると、違う景色が目に入ってきます。つまり、1876 年は別の意味で創立と見てもおかしくないほどの事柄が続出している実に重要な年であることが、判明いたします。この「非常識」な見解に従いますと、今年、いや今年も立派に同志社創立 145 年という節目にあたる、というわけです。

今日のテーマが、ちょっとヘンテコリンな「同志社にとっての 1876 年」になぜなったのか、設定理由がお分かりいただけたでしょうか。あろうことか 1875 年に京都で同志社が開校したこと自体が、そもそも不可思議なことです（拙稿「同志社が京都にできたミステリー」、拙著『マイナーなればこそ～新島襄を語る（九）～』思文閣出版、2012 年、を参照）、1876 年に同志社に起きた一連の出来事もそうなんです。

同年の動向があればこそ同志社は今に続いていると言え、びっくりされまじょうが、今年の夏のシンポジウムはこの謎に着目して、それを解明するために開きます。

## 個別テーマは 4 つ

「まえがき」はこのくらいにして、目次に移ります。謎解きのために、全体テーマを 4 分割し、個別テーマを 4 つ設定いたしました。まずは、(A) 1876 年に起きた特異な出来事として男子校（同志社英学校）が寺町から今出川（近く）に移転したこと、(B) 次に女子塾（京都ホーム。同女の前身）が開かれたこと、そして 3 番目に (C) 3 つの教会が市内に設置されたこと、

です。これらが出揃うことで、同志社（新島襄）はようやく理想とする教育が行えるようになったのです。だから、同志社の実質的な開校は、ここからと見ることができます。

じゃ、次に問題とすべきは、なぜこれら (A)～(C) が 1875 年には見られなかったのか、です。答えは、(D)「熊本バンド」の存在です。これを 4 つ目のテーマにします。

(D) 抜きには、同志社の歴史が語れないことは、いまさら言うまでもないのですが、(A) だけでなく、(B) や (C) の誕生にも大きな働きをしていることに注目すべきです。(D) は、同志社を支える (A) から (C) の 3 本柱が拠って立つ前提を形成したという意味で、建築で言えば家屋の土台に当たります。基礎がきちんと据えられてこそ、家を支える 3 本柱がきちんと建てられるのです。

以上の 4 つの個別テーマの発表は、時系列に従って、(D)、(A)、(B)、(C) の順番で 4 人が受け持ちます。発表者の人達も私の判断です。これぞという適任者を選出、指名し、それぞれくどき落としました。

そこまではよかったのですが、困ったことにコロナ禍のために 4 人は一度も一堂に会せず、そのため打ち合わせがまったくできておりません。いわばぶっつけ本番です。

したがって、昨日の東京オリンピック・男子 400 m リレーの日本チームのように、バトンがうまく繋がらないミスが起きてしまうかもしれません。出場者にとっては、いわばドキドキレースなんです。視聴者の皆さまもスリルを含めていっしょに「謎解き」を楽しんでいただければ幸いです。

#### 4 人の発表者

本番の発表前にもうひとつお断りがあります。日程が「一日」ではなくて「半日」になりました。だから今年の研究会は、羊頭肉肉というか「偽装一日研究会」です。しかも半日と言っても実質は 2 時間に短縮されましたので、発表者の持ち時間も 20 分に制限せざるをえません。そのため、プログラムは 4 人が発表するシンポジウム一本だけです。お昼には閉会する予定です。

最後に、4人の発表者の紹介です。トップバッターは、本学法学部卒で歴史家の大越哲仁さん。公益財団法人蘇峰会（静岡市）の理事として徳富蘇峰研究にも明るい方です。蘇峰と言えば、熊本バンドの代表者のひとりですから、このバンドの誕生の経緯から彼らが同志社にやってくるまでをお話いただきます。

2番手は、同志社女子大学宗教部長の小崎眞教授です。男子校がバンドの面々を迎え入れた時期と、学校が今出川近くに移転した時期は奇しくも一致します、それが1876年秋です。

彼らを迎えた英学校は、俊才たちの受け皿として「余科」なる特別コース（クラス）を設けて、神学教育を始めます。このあたりのことは、バンドの後裔のひとりであり、本学神学部卒の牧師でもある小崎先生が、最適任の発表者です。

3番目の女学校の誕生のことは、同女中高と神学部で学び、いま同志社香里中高で聖書科教員をされている工藤尚子先生にお願いいたしました。実は同女と香里は誕生パターンがよく似ていますので（拙著『「同女の母」スタークウェザー～同志社女学校の始まり～』15頁、同朋舎新社、2021年）、私としてはその両方に関係する先生に比較検討していただきたいな、と密かに期待しての人選です。

最初は発表を固辞されていたのですが、「実は同女の中2で世界史を習いました」と聞いてからは、攻め方を変えて「恩師」ハラスメントをちらつかせた圧迫面接で押し切ろうかとも思ったのですが、それを発揮する前に快諾いただきました。

そして最後は私が同志社教会の成立について発表いたします。同志社3本柱の最後の1本で、これで同志社はようやく画竜点睛になります。教会が生まれないと、龍は龍でも同志社は「眼玉」を欠いた龍のままです。

私は新島襄が設立し、初代牧師を務めた同志社教会（礼拝は栄光館）で学生時代（東京オリンピックの年ですから、57年前）に洗礼を受け、いまは責任役員を務めております。教会史も何冊か編んでいる関係上、話しの材料だけは人一倍持っておりますので「自薦」いたしました。

それでは、まず大越様から発表をお願いいたします。